

氏 名	はやせ あつし 早瀬 篤
学位(専攻分野)	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	文 博 第 413 号
学位授与の日付	平 成 20 年 1 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学 位 論 文 題 目	プラトン後期思想における認識と存在の理論

論文調査委員 (主査) 教授 中 畑 正 志 教授 川 添 信 介 准教授 福 谷 茂

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、プラトンの後期著作における存在論と認識論について、それがイデア論に直接的に依拠したものであり中期のそれと基本的に変わらないという「統一の解釈」とも、イデア論は類と種概念に変容したとする「発展論的解釈」とも異なる立場から、より説得的な解釈を提示することを試みたものである。

第一章「プラトンの虚偽論 (1)」では、『ソピステス』260a-264bにおいて、プラトンが虚偽の成立不可能という問題に対して与えた解答について、新しい解釈を提案している。伝統的には、プラトンはこの最終場面で、(A1)「虚偽の言表とされるものは、別のものについての真言表である」と、(A2)「ありもしないことを語っているのであり、それは語ってさえいないことになる」という二つの命題を論駁していると解釈されてきた。しかし実際には、「言表や判断はあらぬものを分有しない方に属する」(260d6-8)という問題に対処しており、伝統的解釈のA2は言表とあらぬものの結合を認める点でこの記述と相容れない。論者はこの場面での問題が、虚偽の言表が語られてこの分有関係が成立するように見える状況で、虚偽不可能論者は(A1)分有されるものがあらぬものであることを否定する(あるものであると主張する)、(A2-2)分有するものが言表であることを否定する(雑音であると主張する)かのいずれかを主張できること、そしてプラトンが最終場で論駁しているのはこのA1, A2-2であることを論じる。

第二章「プラトンの虚偽論 (2)」では、第一章で提示されたプラトンの虚偽論に依拠しながら、二つの主題を扱っている。すなわち、「言表は形相相互の織り合わせにもとづく」(『ソピステス』259e5-6)という言葉の意味と、『テアイテトス』『ソピステス』『ピレボス』という三つの対話篇で扱われる虚偽論の相互関係である。まず、「言表は形相相互の織り合わせにもとづく」という規定については、従来、(1) この場合の形相とは単語を意味している、(2) 形相とはイデアである、(3) 形相相互の織り合わせとは、概念同士の普遍的な関係を指している、という三つの解釈が提示されてきた。論者は、テキストにもとづきながら(3)の解釈が正しいことを論じる。続いて、論者は、『テアイテトス』の虚偽を論じるモデルが対象把握を基礎とするモデルであり、言表を基礎とする『ソピステス』の虚偽論と際だった対照をなすことを論じる。したがって『テアイテトス』の虚偽論は、過去の理論に対する批判という意味合いを持つとともに、プラトンが言表を基礎とする虚偽論を構築するときに、それと対照されるモデルを明示していることを示唆する。

第三章では、『パイドロス』におけるプラトンの問答法を検討している。『パイドロス』265c8-266c1では、プラトンの方法が分割と総合という二つの側面から規定されているが、伝統的には、綜合法は定義の対象となる概念(イデア)をそれよりも上位の概念に帰属させることであり、分割法はその上位の概念を定義の対象に到達するまで分割することであると解釈されている。しかし論者は、この解釈の困難を指摘しそれを斥けた上で、プラトンにとって、「綜合法」は定義の本質的な必要条件であり、定義の対象の多くの事例にもとづいて、それが何であるかの理解、すなわち一つの「形相」を導くことであり、「分割法」には定義のための補助手段と内的な分析という二つの役割があることを論じる。

第四章では、『ピレボス』の問答法を考察する。『ピレボス』の問答法に関するテキストは、(#1) 難しいーと多の問題の

提示（15b1-c9）、（#2）若者の一と多の扱い方（15d1-16b3）、（#3）問答法的手続きの提示（16b4-17e2）、（#4）問答法的手続きと論争的手続きの対比（17e3-5）の四箇所に分けられる。従来の解釈では、#1でプラトンはイデア論に対する深刻な問題を提示しており、#3でその問題を解決していると考えられてきた。それに対して、論者は#1と#2はともに、#4で問答法的手続きと対比される論争的手続きを描写している箇所であると論じる。これらの箇所ですべて問題になるのは、#1に挙げられている問題を二つであると考えなのか、それとも三つであると考えなのか、である。文法的には三つであると考えの方が自然であるが、この場合二つ目の問題の意味を説明するために不自然な挿入をしなければならないので、どちらがより正当であるかは前後の文脈を適切に説明できるかどうかにかかってくる。論者の見解では、従来の解釈はいずれも前後の文脈の説明に失敗しており、その理由は、#3における「類」や「相」をイデアであると想定していることである。むしろ#1の難しい一と多の問題は、「類」や「相」を単一なものとしておくときに、それをイデアとして扱うことによって生じる問題である。したがって、この難しい一と多の問題は、イデア論に対する深刻な問題ではなく、一と多の扱いについてまわる擬似問題にすぎない。さらに、この解釈にもとづけば、#1-4は緊密に連絡し合っていることが確認される。なお#1については、三つの問題を想定することは不可能であると判断して、二つの問題を想定する。

第五章『『ピレボス』における純粋な快楽』では、『ピレボス』53c4-55a11で提示される「快楽は生成なので善きものではない」という命題にプラトンが関与しているかどうかという問題を、関与していると主張するD・フレーデの見解を批判する形で検討している。プラトンは、混合された快楽と純粋な快楽とを区別しており、後者は善き生き方に混ぜられるので善きものであると考えられるが、他方で、純粋な快楽も充足過程として規定されるために、ある種の生成であるように見える。論者は、「快楽が生成である」と言われる意味を再検討し、快楽の生成過程は、身体の状態が崩壊状態から調和状態（＝快も苦もない状態）へと移行する過程に同定されるが、純粋な快楽はもともと崩壊した状態からの回復ではないから、この生成過程とは純粋でない快楽のそれを指すと論じる。他方で、純粋な快楽は「あるものの四分類」（23b5-27c2）のうち「混合されたもの」に帰属することが示唆されるが、このことは純粋な快楽がたんなる生成過程ではなく、「生成した存在」であることを示している。したがって、純粋な快楽は過程と目的の両方を含むものであり、もともと問題となっていた「快楽は生成なので善きものではない」という命題における「快楽」には含まれないのである。

第六章では、第四章・第五章の『ピレボス』の考察を引き継ぐ形で、「あるものの四分類」から、プラトンの生成する世界についての価値の理論を引き出し、それが『法律』における「万有の調和」の思想として集大成されているのを見る。まず、「あるものの四分類」の箇所で、プラトンは「万有のうちに今あるすべてのもの」を「限定」、「無限定なもの」、「混合されたもの」、「原因」の4つに区別し、「原因」が「限定」と「無限定なもの」から「混合されたもの」をつくるという存在論的枠組みを提示している。しかし、この枠組みにおいて「ひび割れたガラス」などの調和状態にない事物をどこに帰属させるのかが問題となっている。従来は、これを「混合されたもの」か、あるいは「無限定なもの」に帰属させてきた。論者はこの両者の解釈を批判した後で、プラトンにとって、この枠組みは手段と目的という関係にある「生成過程」と「存在」（＝「混合されたもの」）との関係において考えられたのであり、調和状態にない事物は、生成過程にあるものとして、それを構成する「無限定なもの」と「限定」に解消されると論じる。次に、この『ピレボス』における存在論的枠組みは、すべての生成するものを規範的領域に包括し、そこに調和状態が成立しているかぎりではそれは価値を持つ、というプラトンの生成世界についての価値の理論を示していること、この理論は他の対話篇とも連絡関係を持ち、プラトン哲学の中心的な主題の一つを形成していることを論じる。最後に、『法律』における「万有の調和」の思想が、「あるものの四分類」を下敷きとしながら、我々すべての目指すべき目的を示していることを論じ、本論考を締めくくる。

論文審査の結果の要旨

一般的には他の哲学者の著作と比べて平明であると考えられるプラトンの作品であるが、その後期の著作は必ずしもそうではない。中期著作で提示される、イデアと生成変化する世界とを区別する存在論およびそれに対応して知識と感覚とを対比させる認識論も、後期著作では影を潜め、かわって真理と虚偽との弁別可能性、一と多、限と無限の関係などの抽象的話題をめぐって、詳細かつ難解な概念分析的探究が試みられている。

本論文は、そのような後期著作において、プラトンが、イデア論を前提とはせずに、どのような存在論と認識論を新たに

展開していたのかを追求したものである。

本論文の重要な成果の一つは、プラトンの虚偽論の問題構成と応答に従来よりも説得的な見方を提示したことである。虚偽の不可能性という問題は、プラトンの後期著作に繰り返し現れる認識論の基本問題であった。この問題に解答が与えられる対話篇『ソピステス』をめぐる、伝統的解釈は、言表（ロゴス）の虚偽が不可能だという主張は「虚偽言表はくあらぬこと」を語っているものであり、したがってそれは何も語っていないことになる」という理由にもとづくのだと考える。したがって、プラトンはそれに対して「くあらぬもの」がある」ことをアイデアの結合可能性に訴えて論証する形で応えていると説明してきた。しかし論者は、対話篇の実際の議論にしたがうなら、虚偽言表の可能性は、「くあらぬもの」がある」ことが確立した後に、そもそも言表がくあらぬもの」にかかわりうるのかというかたちで問われていることを指摘し、この問いはくあらぬもの」にかかわるとすればそれは言表ではなく無意味な発語であるという想定を伴っていると論ずる。論者によれば、プラトンは、「言表とは名詞と動詞の結合である」という操作的な規定を与えることによって有意義な言表が事実から独立に構成可能であることを確保し、そのうえで言表が事実とは異なる事態としてのくあらぬもの」にかかわりうることを、すなわち虚偽の可能性を示したのである。さらにこの言表が「形相相互の織りあわせに基づく」というプラトンの規定は、アイデアの結合関係が直接的に言表の成立根拠になるという意味ではなく、言表が概念間の普遍的な関係を前提として成立することを示すものだ、と理解する。そして後期対話篇に見られる虚偽論の困難全体の背景には、思考や言表を、対象を把握する行為になぞらえるようなモデルが存在したことを指摘し、プラトン自身はそれを批判し、主述の結合という構造をもつ言表に依拠して真偽の弁別可能性を論証したと主張する。以上の考察は、プラトンにとってそもそも虚偽という現象が、なぜ、どのような意味で説明を要求するのか、という最も基本的な問いについて、これまでの解釈よりもテキストに即した理解を提示しており、その意義は高く評価される。

もう一つの成果は、後期の難解な対話篇『ピレボス』の解釈を通じて、プラトンの新たな存在論的枠組みとそれにもとづく価値の理論に明確な形を与えたことである。論者によれば、プラトンはこの対話篇で、限と無限、存在と生成の概念を採用した新たな存在の理論を構築するとともに、同時にこれを「一なるアイデアとその生成界における多なる現われ」というアイデア論の図式へと類同化する誤りに自覚的であった。そしてプラトンは、この新たな理論に依拠して快楽論を展開し、純粋な快楽はたんなるく生成」ではなくその目的であるく存在」をも含むものと理解したのである。それゆえ論者は、プラトンが「快楽は生成過程なので善きものではない」と考えたという従来の有力な解釈を斥け、快楽に独自の価値を認めていると主張する。さらにく生成」を目的としてのく存在」への過程と考える存在論は、すべての生成するものを規範的な意味をもつ領域のうちに包括することによって、生成する世界の内にあっても秩序と調和が成立しているかぎりでそこに独自の価値が実現している、という新たな価値の理論を提示していることになる。論者のこの解釈は、プラトンがアイデア論に依拠しない価値の理論を提示していたことを意味するものであり、重要な問題提起となっている。

さらにこの論文の価値は、このような全体的な見通しを、後期対話篇のなかでもとりわけ難解とされる箇所をあえて選ぶように取りあげ、それぞれについて説得的な読み方を提示することを通じて立証している点にある。従来の解釈に対する模範的と言ってもよい目配りと明確な整理も含めて、個々の難解な箇所についての議論は、それぞれ個別的にもすぐれた注解として読むことができる。

以上のように、本研究はいくつもの優れた考察を提示しているが、しかし問題点も残っている。虚偽論においては、言表が名詞と動詞の結合というだけでなく、一方で名指し他方で述べるという複合的な構造を与えられていることの重要性をより考慮すべきであろう。また論者は、プラトンの後期思想にアイデア論とは独立の重要な論点を見出しながらも、プラトンがアイデア論を維持していたと主張するが、だとすればアイデア論はどのような意義をもっていたのかについてさらなる解明が必要だろう。

しかしこれらの課題も、本論文がプラトンの後期対話篇の理解のために重要な貢献をおこなっていることを否定するものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。2007年11月1日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。